

令和3年度第1回大気環境目標値専門委員会の主な委員意見

項目	No	意見
全般	1	「生活環境上の支障がない目標値」とは、そうした「水準」でいいか。
	2	降下ばいじんについても、調査によって原因特定に至ったのであれば、事業所に対して、単なるお願いではなく強権的なことはできないか。
	3	降下ばいじんの基準の改定のカギとなるのは、臨海部の数値の今後の見通しである。降下ばいじんの現状を一気に改善することは相当難しいと思われる。そのため、今後、固定発生源からの排出を更に改善してもらい、苦情の発生がなくなるような状況をまず目指すことが現実的。 今後、千葉市から事業者への働きかけを引き続き行い、対策が目に見えて推進されていくとの前提で、基準設定を考え、計画期間内に目標達成を目指すことがとりうる方法と思われる。 これには、事業者の理解と協力が重要なカギとなる。
	4	資料2-6で示された降下ばいじんに係る調査方法及びスケジュールに関しては、再考を要する。案を組み立て直し、改めて示すように。
市民モニター	5	市民モニターには期待している。これまでの苦情の実際の中身が明確になる。また、基準に達しているから良いだろう、ではなく、実感に見合った対策を真剣に考えてもらう一助になるのではないか。
	6	試行的調査と市民モニターによる記録の期間を一致させるとしているが、これは、市民モニターに試行的調査と重なる日かどうか分からないようにしたほうが、バイアスを避けられるのではないか。
	7	得られた調査結果からは1日ごとの降下ばいじん量の目安となる値が出てくるが、定期的なモニタリングがどの程度可能なのか。
	8	大気環境の目標値に落とし込むには相当複雑な検討がいる中、このスケジュールで実施可能なのか。
	9	これからアンケートを実施するので、夏場にやるのは仕方ないが、最大値を示した月は春が多い。
	10	20人×2か所、2週間の、これだけの調査とアンケートで、環境目標値を設定するのに足りるのか。
他の考え方	11	他自治体の例は調査しているか。姫路市の例は、苦情のない地域の値を基準にしており参考になる。
	12	不溶性降下ばいじんは固定発生源と土壌の巻き上げが主成分であり、千葉市の測定方法では土壌に関する指標はアルミニウムの含有量くらいしかない。過去の測定データのアルミニウム量から土壌の量を推定し、生活環境への影響が予想できるのではないか。
	13	汚染の多い地域を、汚染の少ない地域並みに引き下げる、といった視点はないか。